

9・25 A2-B-C熊谷上映会

3・11から5年が過ぎ
疑い含め173人が
判定された福島の
小児甲状腺がん

原発との関係を
頑なに否定するどころか
検査を縮小すると言
出した政府・福島県

フクシマの子どもたちの今、
そしてこれから。
私たちは何を為すべきか。



What is happening to the children living in Fukushima?

A2-B-C

フクシマで生きる子どもたちに、今何が起きているのか

運営に協力して下さる方募集しています！



▲甲状腺検査を行う医師（福島共同診療所）

2015年3月、公安当局と思われる妨害によって上映中止となっていた映画「A2-B-C」が、監督の意思と再上映を求める多くの声に支えられて、昨年9月より新しい事務局によって自主上映が可能となり、全国各地で頻繁に開催されています。

映画で撮影に応じた母親たちは「県内で子どもたちを対象に行われた甲状腺検査で、A2判定を受ける子どもたちが年々増えている」と訴えます。撮影当時から3年たった16年3月31日現在、甲状腺がん又はがんの疑いは実に173人に激増しており、今後急増ことが懸念されます。 ※【A2】【B】【C】は、甲状腺に発生した嚢胞（のうほう）や結節（しこり）の大きさによる判定レベルを表している。

■『A2-B-C』 監督：イアン・トーマス・アッシュ 2013 ウクライナ人権映画祭ドキュメンタリー・グランプリ受賞 2017 アム国際映画祭最優秀賞受賞 2013 フランクフルトニッポン・コネクション映画祭 ニッポン・ビジョン賞受賞 日本在住のアメリカ人監督が、カメラにおさめた“フクシマ”。福島で生きる子どもたちに、今何が起きているのか…。71分。

熊谷市商工会館ホール

9月25日(日)13:30時開場、14:00開演

◎A2-B-C上映(71分)

◎フリートーク

入場料:前売り500円 当日700円 中学生以下無料

※国鉄高崎連帯労働組合は、福島共同診療所の活動を支援しており、またJR常磐線延伸による帰還強制=被曝強制に反対して活動しています。



主催:国鉄高崎動力車連帯労働組合 (090-8742-4374 漆原 080-4452-4384 木村)

福島の小児甲状腺がん及び疑い 173 人（16 年 3 月現在）

2016 年 6 月 6 日公表された福島県民健康調査報告によると福島県の小児甲状腺がん及び疑いの人は 16 年 3 月末段階で、甲状腺がんないし疑いは合計して 173 人にも上りました。そのうちすでに 132 人が甲状腺摘出手術を終えている（摘出後、乳頭がん 130 人、低分化がん 1 人、良性結節 1 人と判明した）。

一般に「100 万人に 1～2 人」といわれる小児甲状腺がんが、福島県では約 1600 人に 1 人という、とんでもない高率で発症している。

今回、新たに甲状腺がんないし疑いと診断された 6 人は全員、先行検査（1 順目の検査）の時点には「A1 判定（結節やのう胞を認めなかった）」だったことも明らかになった。先行検査の時点で異常が認められなかった子どもたちが、その後 2～3 年で新たに発症しているのだ。これまで県民健康調査委員会が「放射線の影響とは考えにくい」と主張する根拠とした「事故当時 5 歳以下だった子どもで甲状腺がんが発見されていない」という論拠が完全に崩れたのだ。※『フライデー』（15 年 9 月 25 日号）の記事を一部紹介します。



2度の手術も、リンパや肺に転移。第2人も甲状腺にのう胞が
(2015年9月25日 FRIDAY)

東日本大震災が起きた当日は、Aさんは中学校の卒業式だった。事故直後3日間は外出をひかえていたものの、その後は通常の生活を続けていたという。「県立高校への進学が決まっていました。事故から1週間後には、制服を注文するため母と一緒にJR福島駅前にあるデパートに出かけたんです。高校入学をひかえた子供たちが押しかけ、デパートは超満員。建物の外にまで行列がのび、私たちも三〇分ほど屋外で待たされました」

当時は福島県内の空間放射線量が非常に高く、福島市内では毎時一〇マイクログシーベルトを記録していた。そうした事実を知らされず、Aさんはマスクをつけずに外出していたのだ。翌年の夏休み。自宅近くで行われた県の甲状腺検査で、Aさんに異常が見つかる。県からは「福島県立医大で精密検査をお願いします」との通知が届く。「ノドが少し腫れていましたが、自分で気づけなかった。県立医大で2回目の精密検査を受けたときに医師から『深刻な状態だ』と告げられ、がんであることがわかったんです。高校3年の夏休みに手術を受け、甲状腺の右半分と転移していた周囲のリンパ組織を切除しました」

Aさんは「ウエブデザイナーか学芸員になりたい」という夢を持ち、卒業後、県外の芸術系大学に進学。ところが入学後の健康診断で「血液がおかしい」との結果が出たのだ。「夏休みに帰郷し、県立医大で検査を受けると『ガンが再発している』と言われたんです。治療に専念するため大学も退学。十月の再手術で残っていた左半分の甲状腺とリンパ組織を切除。甲状腺は全摘出することになった。肺への転移も判明、術後しばらくはかすれた声しか出ず、キズの痛みをこらえながらリハビリを続けた。生理不順にもなりホルモン剤を投与。今年4月には肺がん治療のため「アイソトープ治療」も受けた。放射性ヨウ素の入ったカプセルを飲み、転移したがん細胞を破壊するという療法だ。

第二人も「甲状腺に嚢胞がある」との診断を受けている。だが県立医大は発病と原発事故との因果関係は「考えにくい」としか言わない。因果関係が認められないために、現在でも月に6万円ほどの治療費がかかるAさんには、何の賠償もされない。